

式辞

舵引の丘に流れる風の温かさに春の訪れを感じる頃となりました。本日、ここに、県教育委員会をはじめ多数の御来賓の皆様の御臨席を仰ぎ、鹿児島県立与論高等学校第五十四回卒業式を挙行できますことは、私たち教職員にとりましてこの上ない慶びであり、深く感謝申し上げます。

また、保護者の皆様におかれましては、卒業の日を迎えたお子様の姿をご覧になり、感慨もひとしおのことと存じます。心からお喜び申し上げるとともに、これまで本校に賜りました御理解、御支援に対して、厚く御礼申し上げます。

ただ今、卒業証書を授与した四十名の卒業生の皆さん、卒業おめでとう。

私が一学期の始業式で初めて出会った皆さんは、三年生になったとはいえ、まだいくぶん幼さが残る、不安と緊張が入り交じったような姿でした。それが今、晴れやかに堂々と胸を張った皆さんを見てみると、毎日の授業、部活動、数々の行事、仲間や先生方との語らい、あるいは人知れぬ悩みや懸命な努力など、本校での経験、時間の全てが今の皆さんの確かさを作っているのだと感じます。

皆さんは在学中に、単元や題材のまとまりごとに自分で見通しを立てて学習する各教科での学びに加え、総合的な探究の時間では地域の方々の協力をいただきながら、自ら掲げた課題を追求しました。また、体育祭などの学校行事では仲間と協力し、チームとして目標実現に向けて汗を流しました。部活動においては、体育系・文化系を問わず、少人数でありながらも各個人の課題を明確にしながら、練習を工夫し成果を残しました。高校時代のこのような経験の積み重ねは、学びの基本姿勢として、これからの社会を生きる皆さんの支えとなるでしょう。

しかし、基本姿勢だけで、真偽の不明瞭な情報があふれかえる今の時代に、様々なことを学び、自分らしく生き抜いていけるわけではありません。そこには自分の心の中にブレない軸を持つことが必要なのです。だからこそ私は赴任当初から皆さんに、「自分のルーツに誇りを持つ」「与論島で生まれ育ってきた自分に誇りを持つ」と繰り返し訴えてきたのです。今自分が存在しているその源流である先祖たちが、与論という他の地域とは異なる自然環境の中で独自の文化・風習をつくり、それらを引き継いできたからこそ今の自分があるということを意識する。他の地域がどうであれ、自分のルーツを正しく理解してそれに誇りを持って生きている人間は、安易に周りに流されないブレない心の軸を

持つことになるのです。

両親が生きてくれたから今君がいる。じいちゃん・ばあちゃんが生きてくれたから、両親がいて、だから今君がいる。この六人うち、誰か一人でも欠けていれば、君は今存在していない。これだけでもすごいことなのに、ひいじいちゃん・ひいばあちゃん以降、さらにずっと遡って、約三〇〇年前の先祖までたどって考えると、なんと、二〇四六人の命が今の君につながっていることになる。さらに六〇〇年前まで遡れば、その数なんと二〇九万七千五百人。これだけの人が、今の君を生み出すために関係している。約二一〇万人の命が、たった一人の君を作り上げている。その間、戦争や飢饉、天災や疫病など、様々な生命の危機があったはずで、その時二一〇万人のうち誰か一人でも欠けてしまっていたら、今君は絶対にここにいないはずなのに、その君がここにいる。これはとんでもない奇跡です。君はその奇跡の結晶なのです。そして、そのご先祖様の中で、いつの時代かどこかのタイミングでこの与論島に根を下ろした方がいらっしやって、結果、今君が与論島に存在していることも、驚嘆すべき奇跡的な偶然で、まさに誇るべきことなのです。

同時に、六〇〇年前、つまり西暦一四二五年（日本では足利幕府の室町時代応永三二年ですがその時代）だけに限定してみると、その当時この地球のどこかで生きていた君の先祖の数は、一〇四万八千五百七十六人という計算になります。当時は、お互い見ず知らずの、何の関わりもなかったはずの一〇五万人の命が、二〇二五年の今、君一人の命に結集している。このことを考えれば、人間のいがみ合い、争い、憎しみ、いじめなどの事象が何と愚かではかばかしいことなのかよくわかると思います。逆説的に考えれば、他人を傷つけることは、自分の存在や尊厳を傷つけることにもなる。なぜならば、その相手が、命の流れの中のどこかで、君とつながっている可能性も十分にあるからです。このことは、同時に、君は根源的には決して一人ではない、孤独ではないということも意味するでしょう。

私自身、東京で生まれ育ちながらも、親の郷里である鹿児島を就職先を選んだ意味が、今よくわかるような気がするのです。大学四年当時、特に大きく明確な目標があつて鹿児島県の教員を選んだ記憶はありませんが、奄美大島や喜界島の高校に赴任することになり、喜界島の先祖の墓参りを繰り返すうちに、「島の高校生たちをよろしく頼むぞ」と、先祖たちから言われているような気がしたのです。先祖たちが私を離島の高校に引き寄せたのではないか。そこで高校生たちに自信を持たせて卒業させ、彼らに島の発展に寄与させることが自分の

使命なのではないかと感じるようになったのです。そして今、三回目の離島の赴任先として与論高校にいます。私まで命をつないでくれた膨大な数の先祖の中に、与論島に関係する人がきつといたのだと思っています。

このように、人には自分の生き方を規定する心の抛り所が必要で、それこそが「ルーツ」だと思うのです。与論島に根を下ろしたご先祖様たちから皆さんは命を引き継いでいる。この学び舎を旅立ち、新たな環境における人生の中で、どんな花を咲かせ、どんな実をつけるとしても、その栄養を吸収する根っこは与論島にあるのです。その根を張る土地である与論島が、これからも持続発展していくために、皆さんには将来、島に帰ってくる直接人口として、それが無理なら間接人口としてでも、島への貢献を常に考える大人になってほしいと思います。皆さんに命をつないでくれた多くのご先祖様たちに思いを馳せて、彼らが皆さんに命をつないだ甲斐があったと満足してくれるような生き方をしてください。今皆さんが卒業の喜びに胸を打ち震わせていられるのは、友達、先生方、ご家族、そして皆さんに命をつないでくださった多くの方々のおかげなのです。そのことを忘れずに生きることが、今度は皆さんが「命をつなぐ側」として、人としての責任を果たすことにもなると確信しています。「島立ち」前にはご先祖様に手を合わせ、出発の報告を忘れずにしてください。そして「島立ち」の日には、飛行機や船から島の姿を目に焼き付け、「ミツシーク、トーゴナシ」と心の中で唱えてください。

保護者、ご家族の皆様。本日はお子様のご卒業、誠におめでとうございます。十八年前、産声を上げた小さくてか弱い命が今日、こんなにも立派な姿となつて「島立ち」を迎えようとしています。これまでの子育ての中で、お子様が病気になったり怪我をしたり、精神的に不安定になったりして、心配が尽きないこともあったと思います。また時には、生意気な口をきいて、親である自分に反抗的な態度をとり、心労が絶えないこともあったかもしれません。逆に、何かを達成したときの満足げな表情や自信に満ちた態度に、人としての成長が垣間見え、何ともいえない喜びを感じることもあったと思います。そんなふうにして十八年間、親としての喜怒哀楽を存分に味わわせてくれたお子様が「島立ち」した後の我が家は、きつとがらんとして殺風景に感じられ、寂しさが一層募るかもしれません。しかし、親子の関係は永遠に続きます。住む場所は離れていても、同じルーツを持つ家族の絆を大切にしてお子様たちが与論島に張りめぐらせている根っこに、たっぷりと栄養を与え続けてほしいと思います。

最後に、いよいよ与論高校から旅立つ卒業生に、ブラジルの詩人、アデマー

ル・デ・パロスの『神われらと共に』という詩を贈りたいと思います。別名『浜辺の足跡』ともいうようです。この詩に出てくる神は「主」として表現されていますが、その「主」を皆さんに命をつないでくれた「親」に置き換えて聞いてみてください。そして、ルーツに誇りを持って旅立ってください。

『神われらと共に（浜辺の足跡）』アデマール・デ・パロス

夢を見た、クリスマスの夜。

浜辺を歩いていた、主と並んで。

砂の上に二人の足が、二人の足跡を残していった。

私のそれと、主のそれと。

ふと思った、夢のなかでのことだ。

この一足一足は、私の生涯の一日一日を示していると。

立ち止まって後ろを振り返った。

足跡はずっと遠く見えなくなるところまで続いている。

ところが、一つのこと気づいた。

ところどころ、二人の足跡でなく、

一人の足跡しかないことに。

私の生涯が走馬灯のように思い出された。

なんとという驚き、一人の足跡しかないところは、

生涯でいちばん暗かった日とぴったり合う。

苦悶の日、

悪を望んだ日、

利己主義の日、

試練の日、

やりきれない日、

自分にやりきれなくなった日。

そこで、主のほうに向き直って、
あえて文句を言った。

「あなたは、日々私たちと共にいると約束されたではありませんか。なぜ約束を守ってくださらなかったのか。

どうして、人生の危機にあった私を一人で放っておかれたのか、まさにあなたの存在が必要だった時に」

ところが、主は私に答えて言われた。

「友よ、砂の上に一人の足跡しか見えない日、それは私がきみをおぶって歩いた日なのだよ」

令和七年三月三日

鹿児島県立与論高等学校

校長 大倉秀心